

Title

はじめに道徳を身に付け、そして、倫理を生きる

利他のカタログ化不可能性について

Name

近内 悠太

抄録

本稿では、哲学者ウィトゲンシュタインの議論を援用し、硬化した言語ゲームとしての利他ではなく、言語ゲームの変化としての利他を論じる。ウィトゲンシュタイン研究においてしばしば議論されるいわゆる「規則のパラドクス」および「家族的類似性」を紹介、検討し、他者とのコミュニケーションという言語実践における言語ゲームの「収束」「発散」という性質を確認する。その収束／発散が、利他における道徳／倫理の区別と重なっていることが指摘される。さらに、言語ゲームの「硬化」すなわち収束が、言語の逸脱的使用、発散的使用の基盤となっており、言語共同体が採用する典型的な言語ゲームを主体はまず学習しなければならないことが示される。利他に関する典型的な言語ゲームは道徳であり、それはたしかに公共的な形でカタログ化、マニュアル化、一覧表化可能である。しかし、利他の一部門であると考えられる贈与の事故性を確認することで、倫理としての利他は予見し得ないことを示す。

キーワード：言語ゲーム、家族的類似性、道徳と倫理の区別

Abstract

This paper draws on the arguments of the philosopher Wittgenstein to argue for altruism as changing in language games, rather than altruism as a hardened language game. I will introduce and examine the so-called "rule-following paradox" and "familial resemblance," which are often discussed in Wittgenstein's research, and confirm the "converging" and "diverging" nature of language games in the language practice of communication with others. It will be pointed out that the convergence/divergence overlaps with the moral/ethical distinction in altruism. Furthermore, it will be shown that the "hardening" or convergence of language games is the basis for the deviant and divergent use of language, and that the subject must first learn the typical language games employed by the language community. The typical language game of altruism is morality, which can certainly be catalogued, manualized, and listed in a public form. However, by confirming the accidental nature of gift-giving, which is considered to be a branch of altruism, it is shown that altruism as ethics cannot be foreseen.

Keyword: language game, familial resemblance, the moral/ethical distinction

1. 序論

優しい人になりたい。たとえばそう思ったとき、我々はどこから始めればいいのか？ 優しい人になるためのマニュアル本。もしそのようなものがあつたと仮定すると、意志と努力次第で世界中の誰もが「優しい人」になれるはずだ。なぜならこの書物は「優しい人」について、その特徴、性質、行動パターンがもれなく箇条書きされ、詳らかにされたそんなカタログだからだ。たとえば、「誰から深刻な悩みを打ち明けられたとき」という項目を参照すると、この言葉さえ伝えれば、相手が誰であっても、タイミングと文脈を指定さえすれば、その他者を救うことのできるようないわば「魔法の言葉」も当然記載されている。他者からの生を賭した告白に応じる術もそこには記されているのだ。このカタログを参照すれば、われわれがすべき善き振る舞いのすべてを見出すことができるのだ。

もちろん、そのような利他のカタログ、利他のすべてが網羅された『利他全集』は、現時点では存在しない。では、カタログ化された「優しさ」の振る舞いの一覧表は、現時点で存在しないだけであって、いつか人類はそのようなカタログを手に入れることができるのだろうか？ それとも、そのようなカタログは、原理的にこの世界に存在しないのだろうか？

そのようなものは存在し得ず、「優しい人」のカタログ化は不可能である。本稿は、それを示すための試論となる。

2. 利他における他者理解の必要性¹

困っている他者を救うこと、あるいは、救いたい、助けたいと願うこと。一言で表せばそれらは「利他」と言い換えることができるだろう。しかし、ここにはある困難が潜んでいる。他者を救うためには、その他者を理解しなければならないからだ。言い換えれば、他者を救うという意図的な行為には、他者を理解するという前段が含意されている。たとえば、「ありがた迷惑」という言葉がある。それは、ある行為や振る舞いをする側の意識としては利他的な行為だと思っているのだが、それを受け取るこちらにとっては善意の押し付けとなる事象を指す。ありがた迷惑を受けると我々は口ごもる。うまく受け取ることも、さわやかに断ることもなかなか難しい。そのように宙づりにされることによって、気が重くなる。「向けられた善意に対しては返礼をしなければならない」。この道徳が、我々の心を緩やかに、しかし確実に拘束する。だからこそ、利他を行う側には相手に対する「配慮」が要るのだ。かくして、配慮なき利他はすれ違う。

それはたとえば、次のような寓話を考えてみると分かるだろう。ある日、狐が鶴を食事に誘った。狐は平たい皿に盛ったスープを出したが、鶴はくちばしが長く、スープを飲むことができなかつた。平たい皿は狐にとっては飲みやすい形だったので、スープを飲めなかつた鶴だったが、食事に招いてくれたお礼にと、今度は鶴が狐をもてなした。鶴は、口の細長い壺に肉を入れて、狐に差し出した。だが、くちばしを持たない狐はその肉を食べることができなかつた。

純粹な善意だとしても、互いの身体的特徴や食事のスタイルを知ろうとしなかつたがゆえに、二人はすれ違った。互いを想う気持ちが空転し、その行為は行き違う。このずれの根本にあるのは「相手は私と似た存在である」という認識である。逆説的だが、「私とあなたは似ている」と認識することによってすれ違い、「私とあなたは異なる存在である」と知ることによって正しくつながるための道が拓かれるのである。

3. 目に見えない心という存在

「他者理解」、「異文化理解」という言葉は人口に膾炙している。しかし、それらは一体どのような行為なのだろうか？ 何をもって理解した、と言えるのか？ しかも、他者理解の文脈の多くで問題となるのは、さきほどの寓話のような、目に見える身体的形質に由来するものではなく、「心」という目に見えないものを巡る理解であるがゆえに、問題が錯綜する。

そこでひとつ考えてみたいことがある。他者の心は本当に目に見えないのだろうか？

隠された心、内に秘めた想い、内面と外面、あるいは本音と建前。そんな心に関する常識的描像にひびを入れるところから始めてみたいのだ。そのために、まずは、心に関する二つの風景を取り上げてみたい。

一つ目は寓話である。木でできた動かぬ人形であるピノキオが女神の魔法によって、自ら立ち、歩き、話すことができるようになった。では、このとき、一体ピノキオには何の変化が起こったのだろうか？ 手足に操り糸が結び付けられ、人によってコントロールされるだけの「操り人形」から、(現代風に解釈すれば)心を持ったように振る舞う、精巧にプログラムされた「機械仕掛けの自動人形」へと変わっただけではないのか。たとえば、我々の目の前で、ピノキオの手が上がる。「ピノキオが『手をあげよう』と思ったから、手が上がったのだ。」我々の直観はそう捉える。しかし、哲学者ウィトゲンシュタインはこの点に哲学的困惑が潜んでいることを鋭敏に見抜いた。

わたくしが自分の腕をあげるという事実から、わたくしの腕が上がるという事実を引きさるとき、あとに残るのは何なのか(ウィトゲンシュタイン, 1976, § 621)

「手を上げる」という行為から「手が上がる」という現象を引き算したときの解は何か。多くの人は、ピノキオの、手を上げようという「思い」であったり、手をあげたいという「欲求」などと答えるだろう。かくして、行為は目に見えるが、その行為を駆動する「心」はそこに隠されているという常識に陥ることとなる。

我々は言語表現として、心を「持つ」とか「開く」といい、あるいは、心に「留める」や「秘める」という。そういった語彙の使用によって、あたかも実体として心がそこに確固たる地位をもって存在しているように思えてくる。しかし、そのような心にまつわる描像を手にしたところで、事態は一向に進展しない。ゼベットのおもちゃ屋で、その夜、ある一体の操り人形に、どのような「事件」が起こったというのか？

人形と人間は違うと思われるかもしれないが、事情は変わらない。忘れてはならない事実は、我々人間も物理学的・化学的視点からは人形のピノキオと一切変わるところがないという点だ。違う点といえば、木製か脂肪やたんぱく質によって組成されているかという点と、構造が簡素か複雑かの程度の問題だけである。身体を構成する物質に、人間だけが有する何か特権的なものは一切ない。そして、現代的な科学観の下では、我々の身体や脳に、マジカルなものが入り込む余地はない。

我々人間の振る舞いも、科学的見地からすれば、単なる自然現象なのだ。しかし、そのような立場、観点には次のような解決し得ないように思えるある難問が隠れている。認知心理学者スティーブン・ピンカーの次の議論は、物理学的因果では説明できない事実を物語っている。

たとえば、私が大陸の反対の端にいる友人に電話をかけ、二ヵ月後のある特定の日の午後七時四五分に、シカゴのあるバーの入り口で会う約束をしたとする。私は予言する。その日、その時刻に、友人と私は会うに違いない。友人も、ほかの誰も、同じ予言をするだろう。そして、予言は当たる。驚くべきことではないか。

素人が——それをいうなら、科学者も同様だが——数千マイル離れたところにある二つの物体の軌道を、何ヵ月も前に、数インチの誤差、数分の誤差で予言するなど、ほかのどんな分野でありうるだろうか。それも、わずか数秒間で伝えられる量の情報にもとづいて、予言してのける。(ピンカー, 2013年, p.138, 強調引用者)

ピンカーが何に驚いているか分かるだろうか。つまりは、こういうことである。二人の人間を単なる物体だと見なし、そこに物理学の理論を適用したと想定した場合、このようなほぼ確実な精度で、約5百万秒後(二ヵ月後)の物体の配置を予測することなど不可能なのだ。これは、物理学の初歩で学ぶことだが、多粒子系における、任意の一粒子の軌道を予測することは不可能である。簡単に言えば、台風という(人間の行動に比べて)シンプルな自然現象ですら、予測、予言することは極めて困難であることを考えてみればいい。にもかかわらず、「約束」は見事実現し、高い確率で予言は当たってしまうのだ。

さて、ここまでの議論を振り返ってみると次のようになる。

日常的、常識的心理観に基づいて、人間を捉えると、ピノキオの魔法とまったく同様に、我々の身体に科学では説明のつかないマジカルな作用が働いていることになる。これは、当然、現代の科学的認識から採用するわけにはいかない。かといって、科学的常識(=人間の身体運動も単なる自然現象であり、物理学的に記述可能であるという信念)に基づいて推論する場合、ピンカーが指摘したようなパラドキシカルな事実が発生する。

つまり、どちらの世界観に立ったとしても、その道程の先はデッドエンドなのである。ここに至って、この謎に関するウィトゲンシュタインの解消法(解決法ではない)を見てみたい。それは、一言で言えば、心を因果の視座で捉えないという道である。ウィトゲンシュタインの遺したノートブックに次のようなコメントがある。

十六年前に、因果法則それ自身は無意味であり、因果法則を考慮しない世界の考察が存在するという思想を抱いたとき、私は新時代の始まりを感じていたのだ。(ウィトゲンシュタイン, 2005, p.32, 強調引用者)

心を因果的に捉えることを断念し、心や人間の振る舞いを社会的に捉える道がある。それを示す、もう一つの風景としての思考実験を経由することにする。

4. 規則のパラドクスの思考実験

ある教室の風景。教師は足し算の具体例をいくつか黒板に書き、児童に示した。1+3=4や2+4=6といったように。その後、2桁同士の和、2桁と3桁の和なども具体例を示し、どうやら児童たちは複数の具体的計算例から算術の一般的な規則を掴むことができた様子だ。教師は「あとは同じように計算してみましよう」と言って、練習問題を解かせた。しかし、それまで順調に解けていたある児童が3+5の問題に対して、答えは「7」だと言い張った。「どうしたの? これまでと同じようにやっごらん」と言う教師に対し、その児童は「え? 同じようにやっているよ。7は違うの?」と真剣な顔で答えた。計算間違いはしていない、と主張するのだ。教師は「これまでのルール通り、自然な足し算をやりなさい」と粘るが、「さっきやったのと同じように、自然にこうなるよ」と返す。教師の計算結果に異議申し立てをする児童は最初のうちはその子一人だけだったが、その後、そのような逸脱的な児童はどんどん増えていった。しかも、彼らの計算の逸脱の仕方は全員一致しているのだ。ある特定の計算たとえば11+15は30と答え、1022+1999=0、2177+5213=0のように児童の全員が一致して間違えるのだ。どう

やらそれは隣のクラスでも同じらしい。最初のうちは、「みんな違うんだよ、正しい計算はこれでしょ」と指導を続けたのだが、一向に改善されない。しまいには、となりのクラスの同僚の先生まで、「 $3+5$ は 7 なのかもしれない。自信が無くなってきた」と言い出してしまった。

これはウィトゲンシュタインが提示した、ウィトゲンシュタイン研究者の間で「規則のパラドクス」と呼ばれている議論の中で用いた事例をアレンジしたものとなっている（思考実験であるがゆえに、ウィトゲンシュタイン自身はどのような原因によってこのような特殊な演算が発生するのかを語ってはいないが、現実には起こりうる現象として考えやすくするためにこのように改変した。以下の記述についても同様）。この思考実験に登場した児童たちはみな共感覚者だったのだ。共感覚、つまり、数字や記号が色を持って立ち現われる現象であり、彼らは教師が示したいくつかの事例から、色と色とを足して自然な色に見えるような規則として算術を理解してしまったのだ。

さて、なぜ、ウィトゲンシュタイン自身このような算術に関する思考実験を取り上げたのかというと、これと同じ構造がわれわれの言語使用一般に当てはまるからだ。我々は、言葉の「意味」をその事例をいくつか示された段階でたしかに把握することはできる。たとえば「アルパカ」とは何かを知らなかった人であっても、写真で何頭かアルパカを見せられれば理解できたかのように感じる。ある瞬間に、「わかった！」という感覚が訪れる。つまり、その段階でアルパカの「意味（という心や頭の中に浮かぶ何物か）」を掴んで、それ以降その語「アルパカ」を実物のアルパカに適用して同じように何度でも正しく使うことができるように思えるのだ。有限個の事例から、「意味」なる何ものかを掴んで、それ以降、無限の適用が可能になる、と我々の常識は主張する。しかし、この言語観、この言葉に対する描像こそウィトゲンシュタインが破壊しようとしたものだった。ウィトゲンシュタインはそれを算術を例にとって示したのだ。先の児童たちの事例は、計算の意味、つまり「+の意味」が「頭の中で掴んだ自然な意味」として無数に発生すると仮定した場合、このような逸脱の可能性を排除できないことを示すための思考実験となっている。共感覚の子どもたちは3の色と5の色を足すと7の色と相性がいいと感じた（「分かった！」という私的な感覚あるいは「腑に落ちる」という身体的感覚）。それまで教師が見せた事例はすべてその「色の相性」という規則に従ってしまっていて、児童たちは $3+5=7$ が自然なものと感じたというわけなのだ。自然どころか、それ以外の可能性が思いつけないくらい自明なものとして理解してしまった。

もちろん、このようなことは実際には起こっていない。いや、起こっていないだけでなく、仮に起こったとしてもこのように逸脱する児童たちに対して訂正を促し、適切な反応へと教育することができるだろう。だとしたら、帰謬法的に、この思考実験の中の描像のどこかが間違っていることになる。

どこが間違っているかということ、計算や言葉の理解は脳あるいは心的な私的領域の中で行われるものだという前提である。実際の言語使用とはそういったものではなく、数学における計算でさえも「心の中の出来事」などではなく、我々の生活、行為、世界との折衝にさらされているということである。ウィトゲンシュタインはそのような生活や実践と結びついた言語使用を「言語ゲーム」と名付けた。 $3+5=8$ の正しさは、我々の知性、理性によって保証されるものではない。その正しさは我々のさまざまな言語ゲームの全体によってその根拠を得るのだ。 $3+5=7$ としてしまった場合、たとえばまず小学校の理科の実験で行う天秤が釣り合わないという齟齬が起こり、昨日リンゴを3個買ってきて冷蔵庫に入れ、今日5個買ってきたら、7個のはずのリンゴが1個増えているという事態が発生し、7リットルと書かれた水槽に3リットルの水を入れた後に、5リットルの水を入れればこぼれるという事態が発生し、どこかでおかしいと気づく。

先の思考実験の誤りは、算術を我々の生活全体から切り離し、教室の中だけの出来事、黒板と紙の上の出来事に制限してしまったことに由来している。計算を「単なるシンボル変形の規則」と捉えてしまったがゆえに、無数の解釈可能性（心の中に浮かぶ計算の「イメージ」）を許容してしまったのだ。その無数の解釈可能性の中から、ま

ともな算術のルールをピックアップするのは、我々に備わった数学力や知性ゆえではない。それらの逸脱的な可能性を、天秤、リンゴ、水槽に関する言語ゲームが禁じるのである。逆にいうと、だから、共感覚の子どもたちは「 $3+5=8$ 」をさまざまな言語ゲームの中で使用できないことになる。このように何らかの逸脱があれば、それは必ず言語ゲームの他の箇所にも波及する。生活上のあらゆる側面に支障が出るだろう。それほど、我々の言語ゲームは広範囲に渡っているのだ。広範囲であると同時に、それがうまく整合的につながっているのである。

数学であっても、それは言語ゲームの中にある。だとするならば、すべては言語ゲームの中にある。我々の言語実践を、特定の言語ゲームの中に閉じ込めてはならない。これが、この思考実験の帰結である。

我々は、心に浮かぶ内なる感情や気持ちを、言語に翻訳して外部化している、と捉えている。強烈な体験をした際に「言葉にできない」と言うのは、まさにこの常識的言語観を支える直観であろう。感じる心がここにある、しかし、言葉がそれを捉えることができない、と。かくして、他人が一切手を出すことのできない私秘的 (private) な領域に、心が位置付けられる。

だが、われわれは自分の心を語る時、そこには一切私秘的なものはない。悲しい、つらい、切ない、うれしい、ありがたいなど、これらの公共的に使用される語を用いて、自身の心を述べる。これらの語は、算術と同様に、公共的な規則にしたがって使用される。どれほど独特な感覚、感情だとしても、自分一人にしか通用しない言語で心を語ろうとはしない。心を語る時は、必ず公共的な文法にしたがう言語を持って他者に伝えることになる。だとするならば、一体どこに私秘性が宿るのだろうか？ここにウィトゲンシュタインの重要な指摘がある。

もしも表情や身振りや状況がどれも一義的であるなら、そのときには内面が外面であるかのように思えるだろう。我々が外面を読むことができない場合にはじめて、内面が外面の裏に隠されているように思えるのである。(ウィトゲンシュタイン, 2016, p.363, 強調引用者)

簡単に言えばこうなる。他者の心が理解できないときに初めて、そこに他者の心があると知るのだ。つまり、外的振る舞いの意味が見通せないような状況、つまり逸脱的振る舞いがその他者を知る契機となる。逸脱にその他者の心が示される。私とは意見や評価が一致しないとき、その他者の状況そのものを心と呼んでいるのだ。したがって、逸脱的行為そのものに、他者の心が示されているのである。それを傍証する事例をひとつ紹介したい。

中学校一年生のある女の子が母親と共に、カウンセラーの下を訪れた。娘が髪の毛を抜いてしまう癖が治らず困っているという母親。このところ、その癖がひどくなっているという。カウンセラーは「抜毛症は悪いことだからやめさせよう」とはせず、「この子にとっては、何か大切な意味があることなのかもしれない」という思いをもって、接し、向かい合った。その中で分かったことがある。抜毛症は、逸脱的行為ではなく、彼女なりのSOS、救難信号だった。彼女は母親に甘えたかったのだ。しかし、下に妹がいて、自分はしっかりしなければならないし、心配をかけることもしたくない。「抜毛症」とは、そんなアンビバレントな心そのものだったのだ。

優等生で、しっかり者のお姉ちゃん。そんな彼女がおそらく初めてやった、親が喜ばない行動、親を心配させる行動が、抜毛だったのだろう。髪の毛を抜くときの痛みには、お母さんを喜ばせることができない「悪い子」である自分を罰する意味もあるのかもしれない。(田中, 2020, p.22)

その後、ある日彼女が母親に「一緒に寝てほしい」と頼んだという。母親にくっついて眠る日が続き、そこから二ヵ月ほどして、「もう治りましたので、今日で終わりにします」と母親から連絡がきた。

一見すると、抜毛症という症状は謎めいて見える。なぜそんなことをするのか、母親は理解に苦しみ、カウンセラーの下を訪れたのだろう。母には娘のその行為を治してあげたいという利他的動機があった。だが、娘を治し、救うためには、娘を知るという契機が必要だったのだ。たしかに、抜毛症という現象をその現象だけ孤立させて捉えたとしたら、それは我々大人の言語ゲームからの逸脱に見えるだろう。だが、彼女の生活全体、生活史、記憶といった大域的な視座の下に彼女の行為を位置づけたとしたら、その行為の相貌は一変する。心配はかけたくないが、心配してもらいたい。甘えてはいけないのだが、甘えたい。そんな矛盾から立ち現われたのが、自身の髪を抜く、という行為だった。その矛盾した行為そのものが彼女の心だったのだ。その他者の生活全体に目を向ければ、自ずから、その行為が何を示しているのかが見えてくる。彼女を救うには、彼女の生活全体、言語ゲーム全体を想像しなければならなかったのだ。

自分も甘えたいけれど、妹の世話や家事に忙しい母を助けるために、いい子になるしかなかったのだろうか。身長もお母さんと同じぐらいになってきて、もう抱っこはしてもらえなくなってしまうなあ。妹はお母さんと眠るけれど、自分は一人で眠る、淋しいなあ。「しんどい」とか「つらい」と私が言うと、お母さんは心配するだろうなあ。(田中, 2020, p 22)

先ほど、私は「他者の心が理解できないときに初めて、そこに他者の心があると知るのだ」と述べた。通常の言語ゲームから外れる発話、行為はシグナルである。それをトリガーとして、我々は他者に触れる。触れることのできなかつた、私秘性のベールが破られ、そこで他者と出会う。いわば、言語ゲームの破綻、改訂の文脈に利他が現れるのではないだろうか。そこで、以下では、言語ゲームの性質に考え、言語ゲームの発散と収束という現場を確認する。

5. 利他の家族的類似性

ウィトゲンシュタインがいう「因果法則を考慮しない世界の考察」というのは、いわゆる、言語ゲームとしてわれわれのコミュニケーションを捉えること、と言えるだろう。言語ゲームの特徴のひとつに、「家族的類似性」という特性がある。

A が四時から四時三十分までの間、B が自室にくるのを待っている (エクスペクト)、このとき何がおきているだろうか。「四時から四時三十分まで何かを待つ」という句が使われるときのこの句の意味の一つでは、この句が指しているものはその時間中持続している特定の一つの心の過程とか一つの状態とかではないことは確かである。指しているのは、非常に多くのさまざまに異なる心の働きや状態である。例えば私が B がお茶に来るのを待っている際に起きていることは次のことである場合もある。四時に私は自分の手帳を見て今日の日付けの所に「B」の名を見る。私は二人分のお茶を用意する、そして、一寸、「B は煙草はすったかしら」と考えて煙草を出しておく、四時三十分に近づくにつれてそわそわしだす、B が私の室に入ってくるときの彼の様子を想像する。このすべてが「四時から四時三十分まで B を待っている」と呼ばれるのである。この過程の様態変えは無数にあり、それらすべてがこの同じ句で描写される。[では] 誰かをお茶に待っている種々様々な過程に共通にあるものは何だと尋ねられれば、答、それらすべてに共通な一つの特性

というものはない。ただ互いにダブリあっている多くの共通な特性があるが、期待のこれらの事例は一つの家族を作っており、はっきりとした境界のない家族的類似性を持っているのである。(ウィトゲンシュタイン, 2010, pp.49-50)

ここでは、ある人物が自室を訪れることを予期し、期待するという言語ゲームが語られている。そして、「待っている(エクスペクト)」はある心的状態に張られたラベルとしての語ではなく、手帳を見る、お茶を用意する、煙草を出しておく、そわそわしだす、といった、複数の(あるいは無数の)描写を引き受けうることが指摘されている。これは、「待っている」という語だけでなく、「優しい」という語にも当てはまるだろう。「優しい」という語はさまざまなメンバーを抱えた家族としてそこにある。考えてみればこれは至極まっとうな指摘に思えるが、しかし、それでは「優しい」という語の意味があまりにも不確かなものとなり、その語の使用者によってどこまでも発散してしまうのではないかと懸念が発生する。実際、ウィトゲンシュタインは次のようにも述べている。

「かれはそう言う、前日のように彼女のもとを立ち去った。」——わたくしはこの文章を理解しているか。わたくしはこれを、一つの報告の過程の中で聞くときにそうするのと同じように理解しているか。この文章がそこで孤立しているのなら、わたくしはそれが何を扱っているのか知らない、と言うであろう。けれども、わたくしは、ひとがこの文章をどのように使えるのかは、知っているであろう。わたくしは自分でこの文章の脈絡を發明することができるであろう。

(たくさんのよく知られた小径が、これらのことばからあらゆる方向へ向って通じている。)(ウィトゲンシュタイン, 1976, § 525, 強調引用者)

あるいは、もっと積極的に、いわば無限の家族的類似性をはらんでいることを指摘しているものもある。

「考える」という語は、他のあらゆる心理学的用語と同様に、日常言語の言葉であることを忘れてはならない。この言葉が単一の用法をもっていることを期待すべきではない。むしろ、単一の用法をもたないことを期待すべきなのである。(ウィトゲンシュタイン, 1988, § 194, 強調引用者)

つまり、ある語ないしはある文がどのように使用されるかは、脈絡次第であるという事実の確認になっているのだ。ましてや、「考える」という言語ゲームは、ある特定のアルゴリズムに則った「計算」のようなものではない。ウィトゲンシュタインの表現を借りれば、我々はさまざまな「家族」を生み出し、使用することができるようになるのだ。しかし、だとするならば、やはり我々の言語的コミュニケーションはその都度、使用者によってその語や文の意味を変えてしまい、個々人のオリジナルな使用が許容されるような、いわばアナーキーな使用であり、それはもはやコミュニケーションの基盤が消失しているというような事態に陥るはずである。もちろん、実際のわれわれのコミュニケーション全般においては、そのような破綻は見られないように思える。つまり、語の使用にはどこかに従うべき「規範性」というものがあるはずなのだ。

6. 言語ゲームの発散と収束

ここまでの議論をまとめよう。言語使用においては、一方では「家族的類似性」といういわば「発散」という言語の実情があり、他方では、コミュニケーションの全面的な破綻は実際には起こっていないという事実から示されるように、どこかで一定のルールが機能しており、その規範性による言語使用の「収束」があるはずなのだ。この発散と収束をどのように調停すればいいか。言い換えれば、言語使用の可塑性を確保しながら、同時にアナーキーな使用までは許容しない立場というものは、どのようにして可能か。ウィトゲンシュタインは「硬化」あるいは「凝固」(独: *erstarren*, 英: *hardened, petrified*) というアイデアでその調停を行おうとしているように思える。ウィトゲンシュタインのアイデアを確認しよう。彼は、天秤の片側の皿に重りをまず二つ置き、それから同じ皿にさらに二つの重りを置き、その後、もう片方の皿に重りを四つ置くという実験を行う場面を想定し、議論を進める。この実験という経験的事実によって、「 $2+2=4$ 」を証明し、算術を発明するとしてみよ、と語り、その後、次のように結論付ける。

我々は、この二つのボールと二つのボールが四つのボールと釣り合うから、 $2+2=4$ を採用したのかもしれない。しかし、いまや我々はそれを採用しており、それは実験から超然としたものとなっている。——それは硬化している (*petrified*) ののである。(ダイヤモンド, 2015, P.179)

おそらく、人類の黎明期(?)においては、 $2+2=4$ は経験的に確かめるべき事実であったのだろう。しかし、この算術の結果を用いた言語ゲームが広がりを見せ、さまざまな形(実際の生活の場面であったり、公理系による体系立った算術計算の場面であったり)で踏み固められて、その正当性自身が経験によっては検証ないしチェックされなくなり、我々の従うべき規範的なものへとその地位を変えた、という分析である。また、次のようにも述べている。

経験命題のかたちを具えたいくつかの命題が凝固して、固まらずに流れる経験命題のための導管となるのである。この関係はときに応じて変化するのであって、流動的な命題が凝結したり、固まっていた命題が逆に流れ出したりする。

神話の体系が流動的な状態にもどり、思想の河床が移動するということもありうる。だが私は河床を流れる水の動きと、河床そのものの移動とを区別する。両者のあいだに明確な境界線をひくことはできないのであるが。(ウィトゲンシュタイン, 1975, § 96, 97)

この二つの引用部は、算術的命題と科学的命題に関する議論の部分ではあるが、「すべては言語ゲーム次第である」という相対主義(言語使用のアナーキズム)を拒否する意味において、言語使用一般に当てはめて考えることができるだろう。次いでウィトゲンシュタインはそれらの規範の発生する地点を語る。

我々は最初に、言葉を使用するある特定の技術を学ぶ。すると、次いで我々が行う最も自然なことは、我々が使用しない特定の文——矛盾のようなもの——を消去することである。これは他の特定の諸技術と結びついている。

私が将軍で、複数の偵察部隊から報告を受け取ると想像してみよ。一人の将校が報告にやって来て、「3

万人の敵がいます」と言う。それからまた一人、別の将校が報告に来て、「4万人の敵がいます」と言う。さて、ここから実際に何が起こるだろうか。あるいは、何が起こると想定しうるだろうか。私は、「3万人の敵がいて、かつ、4万人の敵がいる」と言うかもしれない。——そして、私はまったく合理的に振る舞い続けるかもしれない。私はたとえば、報告者の一方が嘘つきだとかいつも大げさだとかを知っていたので、3万人の敵がいると想定して行為するかもしれない。しかし、実際の場合には私はもちろん、「まあどちらかが間違っているはずだ」と言うだろう。そして二人の将校に、もう一度戻って見てみるように命令するだろう。

ポイントは、もし私が矛盾した報告を受け取るとしたら、諸君が私を合理的と考えるか否かは、その報告に対して私がどう振る舞うか次第だ、ということである。もし「そうか、3万人の敵がいて、かつ、4万人の敵がいるのか」という風に言うのが私の反応であったなら、諸君は「あなたは一体何を言いたいのですか」と言うだろう。(…)

「矛盾律を認める」とはつまり、「我々が『合理的』と呼ぶある特定の仕方で行う」ということである。(ウィトゲンシュタイン, 2015, pp.378-379)

ここでのウィトゲンシュタインの議論の眼目は、引用の最初の段落と最後の段落にあると考えられる。言語使用とはある特定の技術であり、合理性を満たすものを採用し、矛盾を避ける技術であり、それは行為という実践の中すなわち言語ゲームとともにある、ということである。また、一文目に注目すると、ある特定の技術を「学ぶ」とある。我々は硬化した言語使用から始めるしかないのだ。たしかに、われわれは「優しい」という振る舞いの典型的なパターンを学ぶところから、言語実践を始める。学ぶというよりも、鵜呑みにする、という方が正しいだろう。なぜなら、子どもはまだ「優しい」という語の意味を知らないからである。どの振る舞いや判断が正しかったり優しかったりするののかという思考以前の、語の定義を単独で身に付けることは不可能なのだ。典型的な使用がなければそもそも逸脱は、定義上起こり得ない。逆説的なことだが、言語の発散的な使用は、収束的（公共的）な使用を前提とし、そこに依存しているのだ。

何かを疑う余地のない真理と見なすのでなければ、言葉の意味を学ぶこともできない。たとえば「地球は太陽のまわりを回っている」という命題を鵜呑みにすることが「地球」という語の意味を学ぶことの一部をなし、「夕焼けは美しく、ごみは汚い」という判断を疑わないことによるのみ「美」という概念が使えるようになるのだ。(永井, 1995, pp.199-200)

幼少期のさまざまな教育の場面（家庭、幼稚園、保育園という場で展開される言語ゲーム、あるいは絵本やアニメ、歌の歌詞に描かれる言語ゲーム）を通して、典型的な「優しさ」の振る舞い、利他の振る舞いをまずは鵜呑みにするところから始めるのだ。それらはもちろん「硬化」した利他ではあるのだが、言語使用一般において、つまり利他を巡る言語ゲームのプレーヤーになるためには、まずはその硬化した利他から習得を開始しなければならない。そして、現実の場面において、多くの言語使用が硬化しうるからこそ、辞書による語の定義という制度をわれわれは持つことができるのだ。それは、われわれの言語共同体において、一定程度「硬化」した言語使用を（その都度）カタログ化したものと言える。それゆえ、その言葉遣いは「正しい／間違っている」という他者による指摘と訂正が可能となる。つまり、硬化した言語ゲームにおいては、その語の使用、振る舞い、行為に対する指摘、訂正、非難、評価といった「規範性」が発生することが可能となる（さきほどの将校の矛盾律に関する不合理性の指摘は、将校

の語の使用という以上に、将校の行った「判断」という行為に対する異議申し立てである)。

7. 利他は言語ゲームの変化を伴うがゆえに、マニュアル化、カタログ化できない

さて、ここまでの議論と、利他の一つの形式である贈与における以下の指摘を接続してみよう。

贈与は贈り物が循環していく円環をつくります。この円環の上を、贈り物とその返礼が循環していくことによって、人間のつながりが発生するのです。ところが、この円環を途切れさせる「事故」がおこるとき、その「事故現場」から贈与の安定した円環には組み込まれたこともない、異質な原理が顔を出すのです。その異質な原理のことを、私たちは「純粹贈与」と名付けようと思います。(中沢,2003, pp.62-63)

贈与という現象にあっては、贈ったり贈られたりしたものの価値には、値段がつけられない。つまり、贈与では、ものの価値は計量化されないのだ。また贈与がおこなわれる場所では、ものや言葉の意味もひとつには決定されない。価値や意味を一つに決定するよりも、贈与がおこなわれる場所では、価値や言葉の対話やキャッチボールがくりかえされ、そのくりかえしのなかから、おたがいの間の理解や信頼が生まれてくる、そのプロセスのほうはずっと大切にされているのである。(中沢, 2009, p.148, 強調引用者)

贈与という利他は、それが贈与であるならば、つまり、見返りを求めず、差し出したことも、受け取ったことも意識されない贈り物は、偶発的で予見し得ない「事故」として立ち現われ、その場面では、硬化した言語がふたたび溶け出してしまうということだ。だから、利他および贈与は、その他者と私がそれぞれ暮らす言語ゲーム自体が変化してしまう。それゆえ、生という実践全体が変容してしまうような経験のことなのだ。これと同種の指摘として、たとえば、伊藤亜紗は「利他とは、『聞くこと』を通じて、相手の隠れた可能性を引き出すことである、と同時に自分が変わることである」(伊藤, 2021, p.61)と述べ、中島岳志は「利他はどこからやってくるのかという問いに対して、利他は私たちのなかにあるものではない、利他を所有することはできない、常に不確かな未来によって規定されるものである」(伊藤, 2021, p.107)と語っている。

硬化した利他はたしかにマニュアル化できる。実際に我々は幼少期にそれらを習得し、「優しさ」だけでなく、「善意」や「愛」や「哀れみ」、「救済」や「援助」や「支援」といった語はもちろん辞書の項目として登録されている。我々は教育の初歩の段階で、「優しい」という語の基礎を学ぶ。共同体の内部で、硬化し、凝固した使用をまずは一旦学ぶのだ。そうでなければ、そもそも「優しい」という語が使用できない。しかし、その使用は踏み固められた、公共的なものであり、目の前のたった一人の他者を迎え入れるものとしては不十分であり、ときに暴力的ですらある(本稿の冒頭部で挙げた、鶴と亀の寓話を思い出してほしい)。

だからこそ、生の過程で、「優しさ」を巡る未知の言語ゲームを、つまり利他を生き直さなければならない。その場面において、我々は「利他」というものに対して、単一の使用を、単一の行為の型をもたないことを期待すべきなのだ。偶然性を帯び、コントロール不能な、事故として立ち現われる利他、一元的なものとしてマニュアル化したりカタログ化したりすることのできない利他に、我々は賭けるほかない。硬化した道徳を押し付けないという配慮が利他を発生させる土壌なのである。

8. 道徳から倫理へ

ここまでの議論をもとに、以下では、利他に関する硬化（公共化）した言語ゲームを「道徳」と呼び、偶発的な「事故」として立ち現われる逸脱的な言語ゲームを「倫理」と呼んでみたい。古田は、「道徳」と「倫理」を概念上区別することには、一定の根拠があると語り、次のように論じている。

たとえば、脳死臓器移植の問題や尊厳死、安楽死の問題、生命の操作をめぐる問題などのいわゆる「生命倫理」の問題、それから、情報技術や原発などをめぐる「科学技術倫理」の問題などは、「倫理的な問題である」とは言われるが、「道徳的な問題である」とはあまり言われまいだろう。このことから窺えるのは、まさしく現在進行形の難問——皆が一致するような定まった答えがあるわけではないが、我々の生き方にとって重要であり、考え抜かなければならない問題——を、我々は「倫理」という概念の圏内に位置づけるのではないかと、ということである。他方、「道徳」という概念には、共同体の中で比較的長い時間をかけて定着してきた習慣（慣習、風習、習俗）に類したニュアンスがあるように思われる。（古田，2013, p.244, 強調引用者）

ここでも重要なのは、道徳は共同体を前提としている点である。そして「比較的長い時間をかけて定着してきた」という点は、言語ゲームの「硬化」という性質に重なり、倫理という語が「現在進行形の難問」へのアプローチを指すのは、それらの問題圏が硬化した言語ゲームの内部には回収することができないからだと言えるだろう。

私は、遠藤周作の小説『沈黙』はキリスト者である主人公が、このような硬化し、定着した自身の道徳的な態度に逡巡し、そこから倫理へと至る道を描いた物語と言えるのではないかと考えている。本稿の最後に、『沈黙』の中の風景を紹介、分析することで、利他は言語ゲームの破れ（敗れ）＝事故として立ち現われることを傍証してみたい。

『沈黙』は、主人公である司祭セバスチャン・ロドリゴがポルトガルからキリシタン弾圧の最中の日本にたどり着き、そこで不遇と苦しみの中にあるキリスト教徒たちを目の当たりにし、自身もそこに巻き込まれていく顛末を描いた小説である。次のような場面がある。逃げ回っていた主人公もとうとう警吏に捕らえられてしまう。同じように捕らえられている男女四、五人も洗礼を受けた日本人たちだった。しかし、手をくくられて捕まっているのに、彼らの様子がおかしい。怯えている様子が見られないのだ。「みんな平気なのか」「やがて私たちも同じように死ぬかもしれないのに」と司祭は尋ねた。

「わかりません。あっしょん、パラインに行けば、ほんて永劫、安楽があると石田さまは常々、申されとりました。あそこじゃ、年貢のきびしいとり立てもなかとね。飢餓(うえ)も病の心配もなか。苦役もなか。もう働いただけ働かされて、わしら」彼女は溜息をついた。「ほんと、この世は苦患ばかりじゃけねえ。パラインにはそげんものはなかとですかね、パードレ」

天国（パライン）とはお前の考えているような形で存在するのではないと司祭は言おうとして、口を嚙んだ。この百姓たちは教理を習う子供のように、天国とはきびしい税金も苦役もない別世界だと夢みているらしかった。その夢を残酷に崩す権利は誰にもなかった。「そうだよ」眼をしばたたきながら、彼は心の中で呟いた。「あそこでは、私たちは何も奪われることはないだろう」（遠藤，1981, pp.128-129, 強調引用者）

ロドリゴの司祭（パードレ）としてのすべき振る舞いは正しい教えを語ることだっただろう。しかし、この局面を前にして、彼はそれができなかった。口を嚙んだのである。かといって、「そうだよ」と実際に口にすることも

できなかった。これは司祭としての言語ゲームが停止してしまった場面、言語ゲームが破れ（敗れ）てしまった局面である。このようにして、『沈黙』はロドリゴの躊躇い、逡巡、そしてこのような苦難にある民を救おうとせず沈黙したままである神への疑義が描かれていく。つまり、ロドリゴは日本に至って、そこでは教義通りのキリスト者であることができなくなっていくのである。言い換えれば、それは、キリスト教という硬化した言語ゲームの中にはもはや安住できず、一つ一つの行為に決断と選択が必要とされる状況へと迷い込んでしまった、と言えるだろう。そして、ロドリゴは切支丹を救うために、最終的には踏絵を踏み、「転ぶ」（棄教する）こととなる。しかし、それは道徳を捨て去ることだけを意味してはいなかった。彼は、道徳から倫理へと羽ばたくのである。『沈黙』の最後の言葉は次のようなものとなっている。

聖職者たちはこの冒瀆の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等を裏切ってもあの人を決して裏切ってはいない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。私はこの国で今でも最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの方は沈黙していたのではなかった。たとえあの方は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。（遠藤，1981, p.295）

聖職者とは、教義通りの教えを実践を行っている者たち、つまり、硬化した言語ゲーム＝道徳の住人たちである。ロドリゴは、それを乗り越えてしまったのである。それは、聖職者たちから見れば、足を踏み外すという行為であり、非難の対象となるのは当然であろう。しかし、彼はもはやそのような言語ゲームを生きていない。そのような道徳を生きてはいないのだ。ロドリゴの言葉にあるのは、「聖職者と神」という記号的な関係性ではなく、「私とあなた」という、固有名を持った者同士の、偶然性と一回性を帯びた関係性に思われる。これが「倫理」の風景と言えないだろうか。

前節で、伊藤の「利他とは、『聞くこと』を通じて、相手の隠れた可能性を引き出すことである、と同時に自分が変わることである」（伊藤，2021, p.61）という主張を紹介した。『沈黙』では、まさに、司祭ロドリゴは神の沈黙を聞いたのだ。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）
 「主よ。あなたがいつも沈黙していられるのを恨んでいました」
 「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」（遠藤，1981, p.294）

他者は雄弁に自身の心を語ってくれるとは限らない。第4節で引用したウィトゲンシュタインの指摘は「我々が外面を読むことができない場合にはじめて、内面が外面の裏に隠されているように思えるのである」というものだった。そして、抜毛症の女の子も抜毛症という声なき声を発していたのだった。それはつまり、通常の言語ゲームの破れ（敗れ）という場に「心」が位置しているということである。だとするならば、倫理としての利他は、他者の沈黙に耳をすます、という地点から始まるのではないだろうか。そして、言語ゲームの破れ（敗れ）は定義上予見することはできず、それゆえ利他のカタログ化は永遠に未完のままであり続けるだろう。

¹ 本稿における第2節および第4節は、拙稿「他者を知る道と利他へ至る道」(2021年,「TASC MONTHLY」, No.535, 公益財団法人たばこ総合研究センター(TASC), pp.6-12)における議論、記述と重複している。

参考文献一覧

伊藤亜紗編, 2021, 『「利他」とは何か』, 集英社新書

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, 黒田亘訳, 1975, 『ウイトゲンシュタイン全集 9 確実性の問題・断片』, 大修館書店

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, 藤本隆志訳, 1976, 『ウイトゲンシュタイン全集 8 哲学探究』, 大修館書店

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, 野家啓一訳, 1988, 『ウイトゲンシュタイン全集 補巻2 心理学の哲学2』, 大修館書店

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, イゼル・ゾマヴィラ編, 鬼界彰夫訳, 2005, 『ウイトゲンシュタイン 哲学宗教日記』, 講談社

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, コーラ・ダイヤモンド編, 大谷弘・古田徹也訳, 2015, 『ウイトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇

ケンブリッジ1939年』, 講談社学術文庫

ルートウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, 古田徹也訳, 2016, 『ラスト・ライティングス』, 講談社

遠藤周作, 1981, 『沈黙』, 新潮文庫

田中茂樹, 2020, 『去られるためにそこにいる 子育てに悩む親との心理臨床』, 日本評論社

永井均, 1995, 『ウイトゲンシュタイン入門』, ちくま新書

中沢新一, 2003, 『愛と経済のロゴス カイエ・ソバージュIII』, 講談社選書メチエ

中沢新一, 2009, 『純粋な自然の贈与』, 講談社学術文庫

スティーブン・ピンカー, 棕田直子訳, 2013, 『心の仕組み 上』, ちくま学芸文庫

古田徹也, 2013, 『それは私がしたことなのか 行為の哲学入門』, 新曜社